

近江八幡市は、滋賀県のほぼ中央、琵琶湖の南東部に位置し、近江商人の商家が建ち並ぶ重要伝統的建造物群の残る旧市街地や八幡堀、長命寺（西国第31番札所）などの歴史的・文化的観光資源、そして水郷地帯やわが国の淡水湖で唯一の住区をもつ沖島など、豊かな自然と文化に恵まれ、今では年間500万人を越す観光客が訪れる。しかし、40年前は長命寺を訪れる数万人のみであった。

当時、八幡堀は、ヘドロが堆積し悪臭が漂っていた。その中で、ノスタルジアからでも観光目的でもない保存修景運動を青年会議所（J・C）が中心として推し進めた。これが当市のまちづくり運動のスタートであった。

かねてより私は、「真のまちづくりが出来れば観光客は後からやってくる」という思いをもっていた。なぜなら、観光とは、本来物見遊山を意味する言葉ではなく、易経には「国の光を觀る」とある。従って、国の光とはそのまちの佇まいや自然の風景など「外なる風景」と、そこに住む人々の営みや目の輝き、暮らしの文化などの「内なる風景」の総体であると考えている。これらに触れてこそ、人は心を動かされ、ときめきを感じる。だからこそ、その地を訪れようとする。これが観光の本質である。

こうしたまちそのものの魅力こそが観光の本態性ニーズであり、かつて各地で見られ

たテーマパークを作るなどの一過性の経済効果だけを狙ったものは『流行性ニーズ』に過ぎない。

まちの魅力とは何かを突き詰めていくと、「究極の観光客」の姿が見えてくる。私が考える「究極の観光客」とは、まちづくりのあり方に賛同し、ここなら生涯を終えても良いとする「死に甲斐のあるまち」Ⅱ「終の栖」と決めて移り住んで来られる人たちである。観光は、そのための内覧会とも言えるものである。

人にとって生き甲斐は複数あっても、人生を終える場所はただ一ヶ所。死の間際に「こんなまちで…」と後悔したら、これまでの人生は無意味となる。死に甲斐には属地性がある。

私は青年会議所時代、今では近江八幡のシンボリック存在となった八幡堀の復活・修景保存活動を始め、その後市長時代には、近江商人の商家が建ち並ぶ新町通などの重要伝統的建造物群指定や、近江八幡の水郷の文化庁「重要文化的景観」第1号指定（平成18年）など、一貫して終の栖のまちづくりに力を入れてきた。

地方が観光地を考える上で最も大切なのは、こうした長い歴史の中で築き上げられた風景や固有の歴史、文化遺産、祭りや行事などに根ざし、本質を踏まえたストーリー性のあるまちづくりだと考えている。

観光は終の栖の内覧会

— 死に甲斐のある終の栖のまちづくり —



元
近江八幡市長

川端五兵衛